

特集

「しごと」ができる子どもたち

「仕事」に就くとは、神仏、天皇、主人に「仕える事」だったらしい。仕えてはいないと思う人は、平仮名で書くにこしたことはない。「仕え(奉)る事」が、精霊神、地霊神を祀る自然崇拜のアニミズムならまだしも、その「化身」のシャーマン(呪術師)となって、さらに移相した主従関係の生じる「現人神」に「仕える」者なれば、隷属者そのものになり果てよう。モウジュウ型お仕え人間も、その類かもしれないが。

それに比べると「働く」は「人が動く」と書くに過ぎないので、「傍(はた)を楽(らく)にさせる」意味だと、茶化したような説明も登場してくる。

自然を相手に「人が動き」まわっていたのは、第一義的には生存に欠かせない食糧を得るため働くのであって、動かなければ飢え死にしたからだろう。個人や家族だけで生きていくことの不可能な時代は他者から支えられ、自らも他者を支え「ともに生きよう」という、協同の生命維持装置(共同体)が絶対に必要だった。そこでは、他者を利することが自己を利することにつながることを容易に想像できた。共同体が協同体らしくなるのは、「公共善」とか「共通善」が私事と指示を超えたところであって、労役に無償行為を惜しまなかった自発的な労働からも知り得る。共同体に内在する、ある種の強要(動員)していた一面だけでは、この共益行動への自発的参加の意志は説明できまい。

そもそも労働は近代以前からも過酷な働きではあったが、労働が宗教的、倫理的、文化的な営為の拠りどころであるうちは、従属だとか苦役といった気づきに乏しいところがあった。当事者が疎外された労働であるとより強く感じるようになったのは普遍的な人権の獲得に目覚めていったこともさることながら、近代という時代を支配しはじめる少数者がイノベーションなどと言って前時代価値を否定しながら、それまでになかった人間酷使の新しい働き方を、つまり単純な品物、部品などを組み合わせる工程で過剰なまでにノルマを与え極限状況まで量産させていたからではないか。生産過程において人々を労働力商品だと家畜のごとく扱い、仕えさせ搾取したことによるものだろう。産業革命を契機に事態は一変して、このことが鮮明になったのである。英語圏の用語で翻訳された労働(labor)は、よい仕事(work)とは区別され苦役、過酷の意味合いが強いといわれてきたが、ドイツ・フランス語圏にも同様な語彙が該当するという。

ところが日本の場合、全く同じとはならない。日本人の労働観に脈々と流れ受け継が

れてきた、村落共同体ゆえに見えてくる働く人たちを「労(ねぎら)う」とか、「労(いたわる)」といった、支配層に必ずしも強制されていたとは思えない互いに「おもしろい」精神は、邦訳された「労働」と「仕事」どちらの用語からも読み取ることはできない。つまりヨーロッパ諸国に見られた労働観には「労う」も「労る」の意識はなく、「逆輸出」すると意味不明な訳文しかできないといわれている。

ところで、子どもは、かつてどのように仕事(手伝いも含めて)をしていたのであろうか。「児童労働」の禁止が示されていた経緯があるように、以前には子どもは仕事をさせられていたのである。今のように「子ども」(期)を発見されることもなく、「小さな大人」という認識しかなかった時代には、「小さな大人」が「大きな大人」と同じように過酷な労働環境下に置かれてしまえば、先に心身を破壊されてしまうのは子どもたちであった。大人と同じように働かされていたのである。

他方で、子どもは7歳も過ぎれば丁稚奉公で働き、適度な「しごと」なら辛苦ではなく、クリエイティブで「きまじめ」な「遊び労働」をしていたことも事実である。日々の子どもの躍動感を観察すれば、少しは読みとることができよう。カイヨワとホイジンガーを引用するまでもなく、日本でも昔から子どもは遊びとイタズラの天才だと言われてきた。このような活力があるのだから、子どもでも労働に参加することは難しくはなかったが、近代市民社会と国家は、子どもの労働を禁止して学校へ通わせることを支持して選択もした。

したがって、遊びと学びと同じくらいに「働くことも、楽しいね」と言える子どもたちに遭遇することはないと思われた。ところがワーカーズコープの現場にはあった。例えば「しごとができる小学生」たちを育てた「地域先生」たちだ。「子どもの町」をつくる「国分ほのぼの」(鹿児島県国分市)の子どもたちだ。地域の支柱に囲まれて育つ子どもたちは、ときに「自由労働者」のごとく、ごっこの遊びをしながら喜々として畑や庭で遊びながら働く。これは手伝いなのかもしれないが、子どもたち以外にやってくれる人はいないので、ノルマとしての「仕事」だろう。

猫の手も借りたいほどの農繁期には学校なんぞは休ませ、貴重な労働力としてわが子に「児童労働」させることなど当然だった時代ならともかく(それは自分たち家族が生存するのに必要不可欠な家計を支える当然の行為だったが)、かつての農山漁村の子どもたちでもなかろうに、今どき珍しい光景だ。この地域には、労働能力の基礎陶冶に磨きをかける人間原初の子どもたちが出現しているのかもしれない。自然相手に泥だけとなっても身体の汚れを厭わず、集中して遊び働き呆けている。

もちろん、それだけではない。表紙に飾られている子どもたちと鶏たちは、仲間のような関係にあって遊びながら互いに大きく成長していった。だが片方は逃がしてもらえなく、間もなく「殺される」運命にある。人間は生きている野菜や鶏を育てながら、最

後は育てた動植物の「生命を頂戴」することでしか生きられないからである。生きている米を育て収穫して、腐らないうちに生きた米を食べ続けるという行為を繰り返してきた。

子どもたちは理屈ではなく体得する。働くことの辛さは身体の疲れや怪我による痛みだけでなく、共に居て共に育った動植物と別れるときの悲しみもある。それは昔から日々あったがゆえに大人でも残酷な離別だと思われた。このなんとも後ろめたい感情は、穢(けが)れと浄(きよ)めになって、お祓いや禊となったのであろう。しかし悲哀は慈愛にも転成し、自分たちは生かされているという感謝の念も醸しだす。

とはいえ子どもたちの天性は殉教者にはなりきれない。従順に「仕える事」など難しくて、やはり奇想天外で楽しく好奇心に満ちた「遊びの労働」が好きなのだ。

労働を苦痛の世界へ葬ってしまったのは大人たちではないかと、遊びと働くがいっしょの子どもたちは、大人たちに教諭しているのかもしれない。今の子どもたちの多くは、そのような体験を経ることはなく、様々な見方があるにせよ、子どもたちの見えている労働観は、相当に衰弱していることを本特集で紹介する。

(上平泰博)